

ほとんど実りのない フランスのファームショー

そこそこ儲かった農家はこの冬、どこに遊びに行こうか、などと考えているのかもしれない。決して多くはないが、北海道の一部の農家たちはこの冬の期間を利用して、海外ツアーに出掛ける。

ある者は東南アジアの**快春ツアー**、ある者はヨーロッパ、そしてほんの一握りの者だけが米国に出掛ける。まったく寂しい話だ。正直なだけで農業の勉強のためにヨーロッパに行く必要があるのだろう。

たとえば隔年で開催され、本年は2月22日からパリ郊外、シャルルドゴール飛行場そばで行なわれるシマシヨウが有名だ。確かに室内で行なわれるファームシヨウとしてはドイツ・ハノーバー・アグリテクニカの次に大きなものではあるが、残念ながら得るものがない。この魅力のないシマシヨウになぜか3回ほど行ったが、収穫は限りなくゼロといえるだろう。なぜか？ それは簡単だ、**フランス人が運営しているからだ。**

たとえばインターネットが普及する前に、10名くらいで初めてシマシヨウに行った時にやはり何か感じるものがあった。それはこいつらがフレン

チ（インチキ）くさいということだ。

一緒に行った数名が興味のある機械メーカーのブースに名刺を置き、後ほどパンフレットを送ってもらおうように頼んだ。だが、パンフレットを送ってもらった者は私の知る限りゼロ。いかなる理由で郵送しないのかはわかりかねるが、ゼロは足しても引いてもかけても、ゼロはゼロにしかならない。それが、ドイツ・ハノーバーで同じようにパンフレットの郵送をお願いすると50%の確率に上がる。米国のファームシヨウでは90%の確率でパンフレットが郵送される。昨今のインターネットの普及で資料請求などというアナログ的行為は廃れてきているが、対人間心理の行動パターンとしては面白い結果だと思う。ところが、北海道にはその様なフランス、イタリアの会社と取引できる農機具店がある。建前は米国製が大きすぎて使えない、ヨーロッパ製は北海道にピッタリのサイズの機械があると言うが、本音は価格が米国製よりも安いだけの話であ

Vol.12 中年の主張 「ものづくりとは……」



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

る。使いやすさ、丈夫さ、部品供給を考えた場合、間違いなく米国製の優位が揺らぐことはない。

普段、家族サービスといえ、年に数回の回転ずしが精一杯なのに、初めての家族連れでの海外旅行でオヤジの義務を果たす。奥様たちはシャンゼリゼ通りをシャネルのストゥとヴィトンのバック、そして日頃から旦那様から奴隷のように農作

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

業ばかり手伝わされてきてきたので、久しぶりに、独身時代を思い出すかのようによく歩く。オヤジ連中は理解不能の横文字の農業機械を見て、多くは決して実現しない大規模農場経営を夢見て、楽しんでる。そのことに私は**口を挟む必要はない**のだろう。

初めてフランスの街中を見た時の驚きは今でも覚えている。

古臭い建物ばかりで貧乏臭い。街では犬のフンがそこいら中にある。連中は歴史で飯を食っていて、新しい建物なんてどこにもない、まるで日本の京都の街並みに見えてきた。もしかして夕張並みかもしれない。

よく言えば歴史があり、物を大切にしている、だが日本人ガイドの話は聞くことやほりそうでもない。1997年当時で17万円程度の初任給なのとか。早い話、金がないらしい。当時の日本もバブル後の大ショック中だったが、エッフェル塔が見える高台に止まっていたバス5台中4台は日本人観光客で、もう1台は米国人のものだった。普通のフランス人から見ると、極東アジアの民がなぜこのような豊かな生活ができるのか不思議だ、と思っているとガイドから聞いた。

農業団塊世代って いないんですよ

先月号の「高橋がなりのアグリ猫」を読んだ。がなりさんからは、私を持ち上げていながら最後に「それはものづくりですか？」と質問を越えたけんか腰の挑戦状をいただいた。私も同じように「農業ですか？」と言いつつ合っているのだから、舌戦の相手としては申し分ないとお互いが認めたことになるのだろう。

まず、「ものづくりとは何ぞや?」ということである。いたって単純な答えだが、農業においてもものづくりは**農作物を作ること**以外に考えられない。それを消費者に受け渡しをする仕組みが「流通」であると考えている。利益率を考えれば流通主体にした方が、金まわりが良いのは理解できるが、過去の歴史上、その利益の上がる「流通」に力を注いだ生産者は、間違いなく次の世代には農業経営者ではなくなる。

極論に言うと、東大法学部を卒業して、甲種試験に合格して、財務省で働くのが一番の効率的な仕事であるならば、私のような麦、大豆栽培は一番効率が悪く、一度農業を止めれば、再度農業を行なうことは極めて難しく、その地域でも信用を勝ち得るの

に何世代も必要かもしれない。何か封建的な農村社会を支持しているようなことを発言したが、そうでもない。なぜならば、がなりさんが発言された経済的繁栄を追いかけ、精神的自由を見失ってしまった「農業団塊世代」と言う農業経営者は全国で何名いるか、疑問に思うからだ。北海道でも「**儲けて何ぼ**」なんて下品な会話を出来るのは数名しかない。

残りの99・99%の精神的自由を持ち合わせ、未来に限られる農家はその日暮らしか、営農以外の収入に燃えている者たちばかりだ。私が作る納豆用大豆は国産納豆用大豆のたった2%で、ヒール宮井と呼ばれようが、しっかりと対価を頂戴しているのだから、誰にも文句はないし、言われる筋合いのものでもない。お互いがプロであるならば相手の領域に入ることに意味とリスクを考えていかなければならないと思うが、世間の風潮は全く逆の様である。

消費者と顔を見れる何とか、有機栽培だの全体の1%にも満たないマーケットに迷い込んだら、タイガーマスクの虎の穴からの脱出するよりも難しくなってしまう。そんなやり方は、典型的な**左翼が喜ぶ**やり方だ。おいしい話でみんなを貧乏にし、そのトップ連中は思想的に貧し

さを増長させる洗脳教育を行なう。まっ、ここまで書けば、がなりさんも真剣にカチンと来ていたただけだろう。

私が不在だった昨年10月19日、午後に来客者があったそうだ。家が隣の母親が対応したが、この来客者は高崎市で農業をされていて、母には「北海道の大豆栽培を見に来た」「私は小作人の息子だ」と伝えたそうだ。以前このコラムで「小作人根性は……」と書いたことがお気に召さず、文句のひとつでも言いに来たのか? それとも一戦交えに来たのか。長沼名物のニュージールランド産ラムのジギスカンでもごちそういたしますよ。その時は必ず電話等でアポを取りましょうね。それがコミュニケーションの始まりです。

ただ世の中には(地元だが)、3年間でメールを5回、ファックスを3回、空知支庁から電話をさせると言って連絡をしない、もちろん「人んには」のあいさつもできない非常識の組織もあることをお伝えしよう。間違いなく、そのようなことに疑問を感じることができない親の背中を見て彼らの子供たちは似たように育つのであろう。どこの誰だつて? そんなことできる組織決まっているじゃないですか。みなさん御存じの**あの組織**ですよ。